**益田市・寧波市友好 30 周年記念スペシャル対談**

# 山本浩章 × 川﨑麻央

益田市長　　　日本画家

益田市と寧波市の友好交流議定書締結 30 周年を記念し、両市で記念品の交換を行いました。両市交流の由来となった画聖・雪舟が船に乗って寧波に渡ったことにちなみ、寧波市から益田市へは「古代貿易船の模型」が贈られ、益田市からは益田市出身の日本画家・川﨑麻央さんの日本画を贈りました。
今回は、友好 30 周年記念として、記念品の作者である川﨑麻央さんと山本市長のスペシャル対談をお届けします。

## ―本格的に絵を描き始めたのは高校卒業後―

**山本**　川﨑さんは、中学生の時に益田市少年友好訪問団の一員として寧波に行かれたそうですね。

**川﨑**　中学3年生のときに、訪問団に選んでいただき寧波市を訪問しました。ホストファミリーに西湖などいろいろな観光地にも連れて行ってもらいました。朝ごはんは屋台で食べたり出前を取ったりする文化で、一人前がすごく多かったのが印象的でした。

**山本**　中学生の頃は運動部に所属されていたと伺いましたが、絵を本格的に始めたのはいつ頃ですか。

**川﨑**　本格的に描き始めたのは高校卒業後です。高校最後の進路希望の辺りで、いよいよ進路を決めなきゃいけないときに、どうしようっていろいろ考え始めました。きっかけというきっかけは正直ないんです。母が学芸員で、小さい頃によく美術館に連れて行ってもらったような気はします。絵の道に進むことに対して「いいじゃん」と言ってくれるような環境ではあったと思います。

**山本**　高校3年生で進路を決めようというときに、突然絵の道に進もうっていうのは、勇気のいることだったでしょうね。

**川﨑**　今までコンクールとか出したこともないのに言い出しにくいなっていうのが正直ありました。でも母が、言いたいこと、言いにくいことがあるんじゃないかと察したらしく「画家の道に進みたいんじゃないの」と言ってくれて。

**山本**　お母様は川﨑さんの気持ちに気づかれていたんですね。

**川﨑**　そうですね。当時、母は雪舟の郷記念館の館長で、同じ館長仲間で浜田市の石正美術館の館長をされていた平坂先生に相談をしたら、先生が絵を教えてくださることになったんです。

**山本**　平坂さん、私もよく存じ上げています。

**川﨑**　平坂先生には本当に親身にサポートしていただきました。アトリエみたいな建物の鍵をもらって、放課後自由にそこに行っては夜まで描いてました。たまに先生が休みの日に来られて、ここをこうしなさいという指導ではなく、新しいモチーフを持ってきてくださったり、先生の浪人時代の話を聞かせてくださったり、使っていた水彩絵の具のパレットを見せてくださったりしました。そのうち、イメージが現実化してくるというか。高校3年の終わり頃には、どうなるかわからないけど、とりあえず美大を受験してみようと決意していました。

**山本**　勉強だと、模擬試験とか学校の成績とかで、今自分がどのくらいの位置にいるのか、いけるいけないがわかると思うんですけど、絵の世界って点数がつけられないですもんね。

**川﨑**　だからこそできたのかもしれません。未知数すぎて。初めて美大を受験したときは、試験中にも学ぶことがありすぎて。試験時間が12時間ぐらいあるんですけど、こういう人たちはこんな風に鉛筆を使って、こんな道具を持って、

**益田市から寧波市への記念品**

〈日本画〉
作者
川﨑麻央
作品題名
「海を渡る雪舟」
和紙(楮)、岩絵具、金属箔、金属泥、2022

こういう感じでやるんだな、なんかすごくノウハウがある世界だなって。やっぱりもうちょっと勉強したいって受験中にも感じて。両親に浪人させてくださいってお願いして、高校卒業後、名古屋の美術予備校に通ったのちに、東京芸術大学で学ぶことになりました。

**山本**　その後、数々の素晴らしい賞を受賞されていますよね。大観賞を取られた作品を私も拝見しました。

**川﨑**　あの作品は吉田南小学校の音楽室をイメージして描いたものです。音楽室の幽霊というか、肖像画ってちょっと怖いよねみたいな。あとは、当時、先生の伴奏に合わせて、音楽室で椅子取りゲームとかやってたなとか。そういう強い記憶を凝縮して1枚の絵にできないかなって。

## ―神楽は、身近な生活の一部 「暮らし」そのもの―

**山本**　作品が完成した時は、この作品は評価されるという確信はあるものなんですか。

**川﨑**　実はあまりないんです。神楽を描くところから始まって、神楽の元になった日本神話にも自然に興味が出てきて、神話とかも描いてきましたが、だんだん自分の中に落とし込むのが難しくなっていったんですよ。自分にとって神楽は、身近な生活の一部、「暮らし」そのものだったという感覚で、神話となるとやっぱりちょっと物語というか、自分との距離感がなかなかつかめなくて。これまで神楽が何で描けてたのかなとふと考えると、子どもの頃から、自分が長期間そこに身を浸してきたからわかるというか。太鼓の音が心に刺さる感じとか火薬のにおいがこんな感じだったとか、自分の体の大きさで神楽を認識してるという言い方はちょっと抽象的ですが、なんかそのつかみ方が、いわゆる神話を描くときとは自分の感覚が違うんです。自分が経験した中で、神話に通ずるような不思議さも表現できるんじゃないかなって。原点回帰じゃないんですけど、そう思えるようになったとき、ちょっと表現を変えていったら大きな賞をいただいたので、とても勇気になりました。

**山本**　描くことによって自分の得た感動がよりわかってくることもあるんですね。

## ―遣明船で寧波に渡る 48歳の雪舟さんをイメージして―

**山本**　今回の記念品の雪舟さんの絵はどのような思いで描かれたんですか。

**川﨑**　雪舟さんの肖像画で古いものが残っているんですけど、晩年期の70歳代の雪舟さんとか、小坊主時代の雪舟さんの絵が多く、中年期に中国に渡った頃の雪舟さんの絵がないなと気がついて、晩年の絵を見ながら若返らせていくという挑戦をしました。ワクワクしてるのか、緊張してるのかわからないけど、遣明船に乗って寧波に向かうイメージの雪舟さんを描けたらいいなと思いました。小さい頃から雪舟さん、雪舟さんって聞いてて、なんとなく親しみもあるし、素朴で、愚直なところもありそうな、優しそうな印象がありました。

**山本**　あの絵も優しい顔をしていますよね。物語で知っている雪舟さんじゃなくて、自分が幼い頃から触れ合ってきた雪舟さんの印象があったんですね。背景は波になっていますね。とてもロマンチックですね。

**川﨑**　そうですね。結構、荒波だったのかなとか、帆が張ってあるような遣明船に乗って命懸けだったのかなとか思うんです。ワクワクだけじゃない気持ちとかいろいろとあったと思って。48歳の時に勉強しようと思い立って、本場のものを学びたいとか、そういう熱量みたいなのを持っている人だなっていう印象があったので、そういう時代の雪舟さんが描きたいなと。

## ―人より遅いとか早いとか関係なく、やりたいと思ったときが、一番吸収できる瞬間―

**山本**　最後に、益田市の子どもたちにメッセージをいただけないでしょうか。

**川﨑**　私は自分が絵を始めたのはそんなに早くはないという自覚があって、でも、やろうと思った瞬間がベストタイミングだということは伝えたいなと思います。やっぱり遅かったかなって自分でも思ったり、人に言われたりして不安に思いますが、でも高校生のときとか、子どものときってすべて未経験の状態で判断しなきゃいけない。やっぱりとにかくやってみて、人より遅いとか早いとか関係なく、やりたいと思ったときが、一番吸収できる瞬間だと思うんです。自分の人生のペースというか、自分の直感を信用してくださいって。今、自分がこれに興味があるっていうのは理由がある、そう思っています。

**山本**　自分の可能性を自分で見限ってはいけない。可能性はあるかもしれないと自分を信じて、まずはやってみるってことですよね。実体験に基づくだけにすごく説得力のあるお言葉ですね。本日はありがとうございました。ますますのご活躍をお祈りしています。

**川﨑**　頑張ります。ありがとうございました。

### 川﨑　麻央　Mao Kawasaki

1987　益田市生まれ
2010　東京藝術大学 安宅賞
2012　東京藝術大学日本画卒業
　　　全国美術大学奨学日本画展奨励賞受賞
2014　東京藝術大学大学院美術研究科日本画研究領域修了 杜賞
　　　第 29 回有芽の会 法務大臣賞
　　　再興第 99 回院展 初入選（同 '15、'17、'18）
2015　第 70 回春の院展 初入選（以降毎年）
2016　第 1 回石本正日本画大賞展 奨励賞
2017　東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻日本画研究領域修了
　　　修了作品野村美術賞 東京藝術大学収蔵
2018　第 73 回春の院展 奨励賞
2020　第 75 回春の院展 春季展賞、郁夫賞、第 11 回春の足立美術館賞
　　　再興第 105 回院展 奨励賞、第 26 回天心記念茨城賞
2021　第 8 回東山魁夷記念日経日本画大賞入選
　　　再興第 106 回院展 奨励賞
　　　日本美術院特待推挙
2022　再興第 107 回院展日本美術院賞（大観賞）・東京都知事賞
現在　東京藝術大学日本画テクニカルインストラクター
　　　日本美術院特待

**もっとみる**

二人の対談を
もっと読みたい方はこちら！

市ホームページ▶

問 市観光交流課
☎ 31-0106